

小学校・中学校英語教師のためのラテン語起源の語彙理解

犬塚 博彦

1. はじめに

本稿は、筆者が岩手大学教育学部で担当している「小学校英語」および「英語学特別講義B」において、「英語語彙の史的変遷」というテーマで取りあげた講義内容をもとに、英語学習の早い時期に学ぶ基本語彙の中にも数多く含まれるラテン語起源の語を、中学校英語教科書 *Sunshine 1* の中から抽出し、それぞれの語の変遷について英語史・ラテン文法・ロマンス言語学における知見を盛り込んで詳細なる記述を試みたものである。

2. 本稿で記述対象とする語彙の選定

Sunshine 1 は教科書の最後のところに新出単語リストが掲載されており、その中で最重要語にはアスタリスクが付与されて他の語と区別されている。つまり、*Sunshine 1* は中学1年用の教科書であるので、アスタリスク付きの語は英語学習の最も早い時期に学ぶ語であるといえる。本稿では、そのアスタリスク付きの最重要語彙の中から、ラテン語起源の以下の28語を抽出したうえで考察を加えることとした。

- (1) animal, (2) arrive, (3) beautiful, (4) change, (5) city, (6) class,
- (7) color, (8) difficult, (9) face, (10) family, (11) famous, (12) hour,
- (13) idea, (14) interesting, (15) just, (16) letter, (17) minute,
- (18) nice, (19) number, (20) picture, (21) place, (22) please,
- (23) question, (24) school, (25) station, (26) student, (27) study,
- (28) table,

3. 本稿における記述方針とその手順

上記28語それぞれについての記述方針としては、概略だけ先に述べると、まず前段ではその語が古典ラテン語を起源とすることを示した上で、ラテン文法に基づいた語形分析を行い、後段ではラテン語から変化した現在のロマンス諸語の語形を合わせて示すこととする。

記述の具体的な手順としては以下のとおりとする。まず、選定した28語について、現代英語を出発点としてその語形を過去に遡る中で、中英語の語形につい

て触れた上で、それが古フランス語からの借入語である場合にはその語形を示す。なお、古フランス語とは、(ユグ・カペーの即位した)987年から(フィリップ・ド・ヴァロアの即位した)1328年までの期間を指すものとする(島岡 1974 : 23)。

次に、古フランス語の語形をさらに遡り、たどり着いた先の古典ラテン語の語形をラテン文法に基づいて詳細に記述する。筆者はこれまでさまざまな英語語源辞典にあたってみたのであるが、ラテン語部分の記述が大まかになっているものも散見され、これでは辞典を引いた人にそのしくみが精確に伝わらないのではないかとすることが気になっていた。例えば、ある英語の語源辞典で *student* という語を調べると、「ラテン語の動詞 *studēre* の現在分詞 *studēns* に由来する」というところまでは記載されているのであるが、ではその現在分詞 *studēns* がラテン語内部でどのようなプロセスを経て後の時代の *student* の基になる語形が生じたかについては何も触れていない。つまり、記述にすき間があり空白が存在するのである。この空白部分を補うには、ラテン文法およびロマンス言語学の側からの説明が必要なのである。本稿では特にこの点に着目した。すなわち、ラテン文法に基づいた詳細な記述を行い、さらにロマンス言語学の知見を反映した説明を試みたというのがその最大の特色である。

また、各語の記述の最後のところでは、そのラテン語の 2000 年後の姿、つまり現在のロマンス諸語の語形をも併記することとした。これにより、ラテン語というものを間において、語彙の面での現代英語と現代ロマンス諸語の間に見られる綴り字の上での関連性が直観で把握できるように配慮した。ただし、同一語源で類似した綴り字であっても、ロマンス諸語の間で意味の差が生じている語についてはその都度説明を加えることにした。なお、本稿で取りあげるロマンス諸語は、日本国内で比較的学习者人口が多いフランス語・スペイン語・イタリア語の 3 言語とする（つまり、ポルトガル語やルーマニア語等の他のロマンス諸語については本稿では扱わない）。

4. 本稿におけるラテン語の語形表記について

本稿におけるラテン語の語形表記について触れておく。まず名詞類についてであるが、名詞は単数・主格形で、形容詞は単数・主格・男性形で表記する。名詞・形容詞については、後のロマンス諸語へと変化する基となったのは対格形であるので、単数・対格形も併記する。動詞については、能動態・現在不定詞の語形で表記し、現代ロマンス諸語の動詞の不定詞との類似性が直観で把握できるように配慮した。

ここで、本稿で使用するラテン語の文法用語に関しても一言触れておきたい。

印欧語比較言語学では、名詞類については「曲用」という用語が伝統的に用いられるが、本稿では、多くのラテン文法書で使用されている「変化」という用語を曲用という言い方の代わりに使うことにする。その他のラテン文法の用語については大西(1997)に依るものとする。

5. 個々の語に関する記述

(1) animal 「動物」——【古典ラテン語】 animal

英語 animal の中英語期の語形は現代英語と同じ animal であり、これは古フランス語からの借入語であった。その古フランス語の語形も animal で、これを遡ると古典ラテン語の animal にたどり着く(寺澤他 1999: 47)。つまり 2000 年前の古典ラテン語の時代から今日に至るまで綴り字が安定的に推移していることがわかる。

ところで、古典ラテン語の animal は、ラテン文法では第3変化の中性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形も同じく animal であることから、以下に示すように、今日のロマンス諸語にもそのままほぼ同じ綴り字で継承されている。

(現代フランス語) animal (イタリア語) animale (スペイン語) animal

(2) arrive 「着く」——【関連ラテン語】 ad rīpam

英語 arrive の中英語期の語形は現代英語と同じ arrive であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は ariver であり、これをさらに遡ると俗ラテン語の *arrīpāre, *adrīpāre (語義は 'come to shore') にたどり着く。このうち *adrīpāre については、ad rīpam すなわち ad 「～へ」 + rīpa 「岸」の要素から成り立っていることがわかる。このうち rīpa の原義は「川によって切り取られるもの」(下宮他 2004: 29)であり、これが後の古フランス語で rivière となり、さらにその後、英語に借入されて現代英語の river へとつながっていく(寺澤 1999: 1191)。

以下、俗ラテン語 *arrīpāre, *adrīpāre をもとに変化したと考えられる現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) arriver (イタリア語) arrivare

(スペイン語) arribar [cf. llegar]

このうちスペイン語の arribar は、フランス語やイタリア語と語源を同じくするものの、「(船が)入港する」という意味が第一義であって、「着く」という意味では llegar のほうが今日のスペイン語では一般的である。なお、参考までに、ス

ペイン語の *llegar* は俗ラテン語の **plicare* 「近づく」そして古典ラテン語の動詞 *applicāre* 「近づける」から変化したものである。

(3) beautiful 「美しい」——【関連ラテン語】 *bellus*

英語の *beautiful* は「ロマンス語(*beau*-「美」)とゲルマン語(-*ful*「満ちた」)の混種語」である(下宮他 1989: 47)。すでに 1443 年頃には現代語と極めて近い綴り字の *beauteful* (「美しい」)という語が存在していた。以下、本項では語幹部分の *beaute* について考察する。

中英語期の *beaute* は古フランス語からの借入語であり、その古フランス語の語形も同じく *beaute* であった。これをさらに遡ると俗ラテン語の **bellitāte* にたどり着き、これは古典ラテン語の *bellus* と関連づけられる。

古典ラテン語の *bellus* はラテン文法では第 1・第 2 変化の形容詞で「愛らしい、綺麗な、上品な」「よい、健全な」を意味する。その単数・対格形(男性形)は *bellum* である。以下、*bellum* (語末/*m*/音は早い時期に消失)に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *beau* (イタリア語) *bello* (スペイン語) *bello* [cf. *hermoso*]
このうち、スペイン語の *bello* は「美しい」という意味ではあるものの、「文語的、改まった表現に用いられる(秦 1999: 21)」ため、より一般的な語としては *hermoso* が使用される。なお、スペイン語の *hermoso* は古典ラテン語の *formōsus* 「形のよい」に由来する。

(4) change 「変える」——【古典ラテン語】 *cambiāre*

英語 *change* の中英語期の語形は *chaunge* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *changier* であって、これをさらに遡ると後期ラテン語 *cambiāre*、さらに古典ラテン語の *cambiāre* (「交換する」)にたどり着く(寺澤 1999: 215-216)。以下、*cambiāre* に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *changer* (イタリア語) *cambiare* (スペイン語) *cambiar*
なお、古典ラテン語 *cambiāre* の語頭の /*k*/音は、イタリア語およびスペイン語では現在に至るまで同じく /*k*/音のまま不変なのであるが、フランス語ではその史的変遷において /*a*/音の前で口蓋化が生じ、[*tj*]を経て[*j*]へと推移している(菅田 2019: 49)。

(5) city 「都市」 —— 【古典ラテン語】 *civitas*

英語 *city* の中英語期の語形は *cite* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *citet* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *civitas* (‘community of citizens, the state’) にたどり着く(寺澤 1999: 234)。

ところで、古典ラテン語の *civitas* は、ラテン文法では第3変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *civitatem* である。以下、*civitatem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *cit  * [cf. *ville*] (イタリア語) *citt  * (スペイン語) *ciudad*
このうちフランス語の *cit  * は、イタリア語やスペイン語と語源を同じくするものの、「古い伝統のある都市」(寺澤 1999: 234)のことを表わし、一般的な意味では *ville* が使われる。

(6) class 「授業、クラス」 —— 【古典ラテン語】 *cl  ssis* 「階級」

class という語が英語で使用されるのは 1656 年以降で、フランス語からの借入語であった(寺澤 1999: 237)。対応するフランス語 *classe* は古典ラテン語からの借入語で、古典ラテン語の語形は *cl  ssis* (‘summons, one of the six divisions of citizens’) であった。

ところで、古典ラテン語の *cl  ssis* は、ラテン文法では第3変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *cl  ssem* である。以下、*cl  ssem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *classe* (イタリア語) *classe* (スペイン語) *clase*

(7) color (米), colour (英) 「色」 —— 【古典ラテン語】 *color*

英語 *color*, *colour* の中英語期の語形は *colour* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形も同じく *colour* で、これをさらに遡ると古典ラテン語の *color* (「色」。原義は「覆い」) にたどり着く(寺澤 1999: 251、下宮他 1989: 100)。

ところで、古典ラテン語の *color* は、ラテン文法では第3変化の男性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *colorem* である。以下、*colorem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *couleur* (イタリア語) *colore* (スペイン語) *color*

(8) difficult 「難しい」 —— 【古典ラテン語】 *difficilis*

英語の *difficult* を史的に遡ると、中英語期は同じ綴り字の形容詞 *difficult* であり、これは同じく中英語期の名詞 *difficulte* (‘*difficulty*’) から逆形成によって生じた語である(寺澤 1999: 359、下宮他 1989: 140)。中英語の名詞 *difficulte* は古フランス語からの借入語であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *difficultās* (「困難」) にたどり着く(寺澤 1999: 359、下宮他 1989: 140)。

ところで、「困難な」という意味の英語の形容詞としては 16~17c に多用されたもう一つの語として *difficile* がある。この *difficile* は古フランス語からの借入語であり、古フランス語の綴り字は同じく *difficile* でありこれをさらに遡ると、古典ラテン語の *difficilis* (「困難な」) にたどり着く(寺澤 1999: 359)。

古典ラテン語の *difficilis* は第3変化の形容詞で、語形成としては ‘*dis*’ と ‘*facilis*’ の2要素から成り立っている。このうち ‘*dis*’ は打ち消しを表わし ‘*facilis*’ は「容易な」という意味(つまり全体で「容易でない」という意味)である(現代英語の関連語: *facilitate* 「容易にする」、*facility* 「容易さ」)。*difficilis* の単数・対格形(男性形)は *difficilem* である。以下、*difficilem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *difficile* (イタリア語) *difficile* (スペイン語) *difícil*

(9) face 「顔」 —— 【古典ラテン語】 *faciēs*

英語 *face* の中英語期の語形は同じく *face* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形も *face* であり、これをさらに遡ると俗ラテン語の **facia*、そして古典ラテン語の *faciēs* (「顔」) にたどり着く(寺澤 1999: 472-473)。

ところで、古典ラテン語の *faciēs* は、ラテン文法では第5変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *faciem* である。以下、*faciem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *face* [cf. *visage*] (イタリア語) *faccia*

(スペイン語) *faz* [cf. *cara*]

このうち現代フランス語の *face* は、改まった表現や解剖学・医学の用語として使うものであって、一般的な「顔」の意味の語は *visage* である(『ロベール仏和大辞典』)。また、スペイン語の *faz* は文語であって、一般的な「顔」の意味の語は *cara* である。

(10) family 「家族」——【古典ラテン語】 *familia*

英語 *family* の中英語期の語形は *familie* であり、これは古典ラテン語からの借入語であった。その古典ラテン語の語形は *familia* (‘household’) である(寺澤 1999: 479)。

ところで、古典ラテン語の *familia* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *familiam* である。以下、*familiam* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *famille* (イタリア語) *famiglia* (スペイン語) *familia*

(11) famous 「有名な」——【古典ラテン語】 *fāmōsus*

英語 *famous* の中英語期の語形は同じく *famous* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *fameus* で、この *fameus* は古典ラテン語からの借入語であった。古典ラテン語の語形は *fāmōsus* (「有名な、名声のある」) である(寺澤 1999: 479)。

ところで、古典ラテン語の *fāmōsus* は、ラテン文法では第1・第2変化の形容詞で、その単数・対格形(男性形)は *fāmōsum* である。以下、*fāmōsum* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *fameux* (イタリア語) *famoso* (スペイン語) *famoso*

(12) hour 「時間」——【古典ラテン語】 *hōra*

英語 *hour* の中英語期の語形は *houre* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形も同じく *houre* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *hōra* (「時間」) にたどり着く(寺澤 1999: 669)。

ところで、古典ラテン語の *hōra* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *hōram* である。以下、*hōram* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *heure* (イタリア語) *ora* (スペイン語) *hora*

(13) idea 「考え」——【古典ラテン語】 *idea*

英語 *idea* の中英語期の語形は同じく *idea* であり、これは古典ラテン語からの借入語であった。その古典ラテン語の語形も同じ *idea* であり、これは古典ギリシア語からの借入語であった。その古典ギリシア語の語形はローマ字表記すると

idéa となる(寺澤 1999: 685)。

ところで、古典ラテン語の idea (‘form, class, ideal form’ 「原型、理念、範型」) は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は ideam である。以下、ideam (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) idée (イタリア語) idea (スペイン語) idea

(14) interesting (interest 「興味」) —— 【関連ラテン語】 interest (<interesse)

英語の interesting については、接尾辞-ing を除いた語(幹)interest を考察対象とする。英語 interest の中英語期の語形は同じく interest であり、これは古フランス語からの借入語であった。その古フランス語の語形も同じく interest であり、これをさらに遡ると語源的には古典ラテン語の「動詞」interest (<interesse) にたどり着く(寺澤 1999: 728-729)。

ところで、古典ラテン語の interest という語は、inter と est の2つの要素から成り立っている。このうち、inter は「間に」という意味であり、est は存在(「ある」)を表わす動詞 esse の直説法現在3人称単数形である。つまり古典ラテン語 interest の原義は「間にある」であり、そこから「重要である」という意味が派生する。因みに現代英語の interest という語にも「重要性」という意味がある(例: a matter of great interest 「重要な事柄」)。

(15) just 「公正な」 —— 【古典ラテン語】 jūstus

英語の just については、中学校の教科書 *Sunshine 1* では「ちょうど」という意味の副詞で最初に学ぶことになるが、ここでは英語史的な観点から、その元となった形容詞「公正な」という意味の just で考察を加えることにする。

英語 just の中英語期の語形は同じく just であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は juste であり、これをさらに遡ると古典ラテン語 jūstus (‘just, upright’) にたどり着く(寺澤 1999: 759)。

ところで、古典ラテン語の jūstus は、ラテン文法では第1・第2変化の形容詞で、その単数・対格形(男性形)は jūstum である。以下、jūstum に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) juste (イタリア語) giusto (スペイン語) justo

(16) letter 「手紙」 —— 【古典ラテン語】 littera

英語 letter の中英語期の語形は letter, lettre であり、これは古フランス語から

の借入語であった。古フランス語の語形は *lettre* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *littera* (原義は「(アルファベットの)文字」) にたどり着く(寺澤 1999: 798)。なお、「手紙」という意味では田中(1952)では4番目の項目に掲載されている。

ところで、古典ラテン語の *littera* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *litteram* である。以下、*litteram* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *lettre* (イタリア語) *lettera* (スペイン語) *letra* [cf. *carta*]
このうち、フランス語の *lettre* とイタリア語の *lettera* には語義として「文字」と「手紙」の両方を含むのに対して、スペイン語の *letra* の語義は「文字」のみであり、「手紙」という意味ではスペイン語では *carta* という別の語を用いる。なお、スペイン語の *carta* は古典ラテン語の *charta* 「紙」に由来する。

(17) minute 「(時間の) 分」——【古典ラテン語】*minūtum*

英語 *minute* の中英語期の語形は同じく *minute* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形もまた同じく *minute* であって、これをさらに遡ると古典ラテン語の *minūtum* にたどり着く(寺澤 1999: 904)。

ところで、古典ラテン語で「(時間の) 分」を意味する *minūtum* は、ラテン文法では第2変化の中性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形も同じく *minūtum* である。以下、*minūtum* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *minute* (イタリア語) *minuto* (スペイン語) *minuto*

(18) nice 「すてきな」——【対応する古典ラテン語】*ne-scius* 「知らない」

英語の *nice* という語は、英語史において極めて著しく意味の変遷を遂げた語である。具体的には、寺澤(1999: 951-952)によると、現代英語につながる「すてきな」の意味では1769年からであり、その前は「美味しい」(1712年)、さらに過去に遡ると「愚かな」(1300~1557)という意味であった。中英語期では今日と同じ綴り字の *nice* が 'foolish' の意味を持っていた。中英語期の *nice* は古フランス語からの借入語であった。古フランス語ではその同じ綴り字の *nice* が 'stupid' を意味していた。古フランス語の *nice* をさらに遡ると古典ラテン語の *ne-scius* ('ignorant') にたどり着く(寺澤 1999: 951-952)。

古典ラテン語の *ne-scius* は、*ne-* と *scius* の2つの要素から構成されている。

このうち *ne-* は打ち消しを表わし、*scius* は動詞 *scire* (「知る」) から派生された形容詞 (第1・第2変化) で「知っている」という意味である。つまり両者を合わせると、古典ラテン語の *ne-scius* は「知らない」という語義を持っていることがわかる。

(19) *number* 「数」 —— 【古典ラテン語】 *numerus*

英語 *number* の中英語期の語形は *nombre* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は同じく *nombre* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *numerus* (「数」) にたどり着く(寺澤 1999: 966)。

ところで、古典ラテン語の *numerus* は、ラテン文法では第2変化の男性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *numerus* である。以下、*numerus* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *nombre* (イタリア語) *numero* (スペイン語) *número*

(20) *picture* 「絵」 —— 【古典ラテン語】 *pictūra*

英語 *picture* の中英語期の語形は同じく *picture* であった。これは古典ラテン語からの借入語であった。古典ラテン語の語形は *pictūra* (「画くこと、絵画」) で、第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *picturam* である。以下、*picturam* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *peinture* [cf. *tableau* : 絵]

(イタリア語) *pittura* [cf. *quadro* : 絵]

(スペイン語) *pintura* [cf. *cuadro* : 絵]

ところで、今日のフランス語の *peinture* は「(芸術のジャンルとしての) 絵画」を表わし、一般的な意味での個々の「絵」は *tableau* である。イタリア語の *pittura* は「絵画芸術」を表わし、一般的な意味での「絵」は *quadro* である。スペイン語の *pintura* は「絵、ペンキ」を表わし、一般的な「絵」という意味の語としては *cuadro* が使われる。

(21) *place* 「場所」 —— 【関連ラテン語】 *platēa* 「広い道、街路」

英語 *place* の中英語期の語形は同じく *place* であった。これは古フランス語からの借入語で、その語形は中英語と同じ綴り字の *place* (意味: 'open space in a city') であった。これとは別に中世ラテン語に「場所」を意味する *placea* とい

う語があり、これは古典ラテン語の *platēa* に遡る（意味：‘open space’）（寺澤 1999: 1074）。

ところで、古典ラテン語の *platēa* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *platēam* である。以下、*platēam*（語末/m/音は早い時期に消失）に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

（現代フランス語）*place* （イタリア語）*piazza* （スペイン語）*plaza* 「広場」
これらはいずれも「広場」の意味を持つ。

(22) *please* 「喜ばせる」——【古典ラテン語】*placēre* 「気に入る」

中学校の英語教科書 *Sunshine 1* では、*please* という語は、「どうぞ」という意味の間投詞として出てくるが、本来は ‘may it pleae you’ 「それがあなたの意にかないますように」という表現に由来するものであることから、本項では動詞「喜ばせる、(人の)意にかなう」という動詞として考察を加えることにする。

英語 *please* の中英語期の語形は *plese* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *plaisir* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *placēre*（‘to be pleasing’）にたどり着く（寺澤 1999: 1079）。以下、*placēre* に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

（現代フランス語）*plaisir* （イタリア語）*piacere* （スペイン語）*placer*

(23) *question* 「質問、問題」——【古典ラテン語】*quaestiō*

英語 *question* の中英語期の語形は *questioun* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *question* であり、これは古典ラテン語からの借入語であり、古典ラテン語の語形は *quaestiō*（問、問題）である（寺澤 1999: 1140）。

ところで、古典ラテン語の *quaestiō* は、ラテン文法では第3変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *quaestiōnem* である。以下、*quaestiōnem*（語末/m/音は早い時期に消失）に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

（現代フランス語）*question* 「問題、質問」

（イタリア語）*questione* 「問題」 [cf. *domanda* 「質問」]

（スペイン語）*cuestión* 「問題」 [cf. *pregunta* 「質問」]

このうち、フランス語の *question* は「質問」と「問題」の両方の意味を有するのに対して、対応するイタリア語の *questione* とスペイン語の *cuestión* は「問題」

という語義のみである。「質問」という意味では、イタリア語では *domanda*、スペイン語では *pregunta* が使われる。

(24) school 「学校」 —— 【古典ラテン語】 *schola*

英語の *school* という語を史的に遡ると、すでに古英語期に *scōl* という語形がある。これは古典ラテン語からの借入語であり、古典ラテン語の語形は *schola* であり、さらに古典ギリシア語の *skholē* (原義は「閑暇」) に遡る(寺澤 1999: 1228-1229)。

ところで、古典ラテン語 *schola* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *scholam* である。以下、*scholam* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *école* (イタリア語) *scuola* (スペイン語) *escuela*

(25) station 「駅」 —— 【古典ラテン語】 *statiō* 「立っていること」

英語の *station* という語を史的に遡ると、「駅、宿場」の意味を持つようになるのは1585年以降であった(寺澤 1999: 1345)。中英語期の語形は *stacioun* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *station* であり、これは古典ラテン語からの借入語であった。古典ラテン語の語形は *statiō* (「立っていること」) であり、これは動詞 *stāre* (「立っている」) から派生されたものである(寺澤 1999: 1345)。

ところで、古典ラテン語の *statiō* は、ラテン文法では第3変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *statiōnem* である。以下、*statiōnem* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *station* [cf. *gare*]

(イタリア語) *stazione* (スペイン語) *estación*

なお、フランス語の *station* は「地下鉄の駅」を表わし、一般的な意味での「駅」という意味ではフランス語では *gare* が使われる。

(26) student 「学生」 —— 【古典ラテン語】 *studēns* (*studentem*)

英語 *student* の中英語期の語形は *studient* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *estudiant* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *studēns* (「研究する人」) にたどり着く(寺澤 1999: 1366)。

ところで、古典ラテン語 *studēns* は、ラテン文法では動詞 *studēre* (「学ぶ、研究する」) の現在幹(*studē-*)に接尾辞(*-ns-*)がついた現在能動分詞・単数・主格形である。現在分詞は第3変化子音幹形容詞として格変化することから(中山 2007:108-109)、その単数・対格形は *studentem* となる。この *studentem* (語末/m/音は早い時期に消失) が基となり、以下に示す現代ロマンス諸語へとつながっていく。

(現代フランス語) *étudiant* (イタリア語) *studente* (スペイン語) *estudiante*

(27) *study* 「勉強する、研究する」——【古典ラテン語】 *studēre*

英語の動詞 *study* の中英語期の語形は *studie* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形は *estudier* であり、これは古典ラテン語から借入されたものである(寺澤 1999: 1367)。古典ラテン語の語形は *studēre* (「研究する」) であり、以下、*studēre* に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *étudier* (イタリア語) *studiare* (スペイン語) *estudiar*

(28) *table* 「テーブル」——【古典ラテン語】 *tabula* 「板」

英語 *table* の中英語期の語形は同じく *table* であり、これは古フランス語からの借入語であった。古フランス語の語形も同じく *table* であり、これをさらに遡ると古典ラテン語の *tabula* (原義は「板」) にたどり着く(寺澤 1999: 1396-1397)。

ところで、古典ラテン語の *tabula* は、ラテン文法では第1変化の女性名詞の単数・主格形であり、後のロマンス諸語へと変化する基となった単数・対格形は *tabulam* である。以下、*tabulam* (語末/m/音は早い時期に消失) に由来する現代ロマンス諸語の語形をあげておく。

(現代フランス語) *table* (イタリア語) *tavola* (スペイン語) *tabla* [cf. *mesa*]
このうち、フランス語とイタリア語は「テーブル」と「板」の両者の意味を持つのに対し、スペイン語の *tabla* は「板」のみであって、「テーブル」という意味では *mesa* が使われる。なお、*mesa* は古典ラテン語の *mēnsam* (「食卓」) に由来する。

6. 結語

以上、本稿では、中学校の英語教科書 *Sunshine 1* の基本語彙の中に含まれるラテン語起源の語について、英語史・ラテン文法・ロマンス言語学における知見を盛り込んでその変遷を詳細に記述してきた。知識には浅い深いの区別がある。

小学校・中学校の英語教育に携わる方々の知的好奇心を引き出すために、敢えて詳細なる記述を試みたところに本稿の意義がある。

参考文献

- 有田潤 (1995) 『インデックス式ラテン文法表』, 東京: 白水社.
- 有田潤 (1986) 『初級ラテン語入門』, 東京: 白水社.
- 犬塚博彦 (2020) 「教師を目ざす大学1年生対象の『小学校英語』—英語学領域からのアプローチ—」『岩手大学英語教育論集』第22号, pp7-24.
- 大賀正喜他編 (1988) 『小学館ロベール仏和大辞典』, 東京: 小学館.
- 大西英文 (1997) 『はじめてのラテン語』, 東京: 講談社.
- 風間喜代三 (2005) 『ラテン語・その形と心』, 東京: 三省堂.
- 片岡孝三郎 (1982) 『ロマンス語語源辞典』, 東京: 朝日出版社.
- 小林標 (2019) 『ロマンスという言葉』, 大阪: 大阪公立大学共同出版会.
- 島岡茂 (1974) 『フランス語の歴史』, 東京: 大学書林, 1974.
- 下宮忠雄他編 (1989) 『スタンダード英語語源辞典』, 東京: 大修館書店.
- 菅田茂昭 (2019) 『ロマンス言語学概論』, 東京: 早稲田大学出版部.
- 田中秀央編 (1952) 『羅和辞典』, 東京: 研究社.
- 寺澤芳雄 (1999) 『英語語源辞典』(縮刷版), 東京: 研究社.
- 中山恒夫 (2007) 『古典ラテン語文典』, 東京: 白水社.
- 秦隆昌 (1999) 『ロマンス諸語対照スペイン語語源小辞典』, 高松: 信山社.
- 文部科学省 (2017) *Sunshine English Course 1*. 東京: 開隆堂出版.
- Baugh, Albert C and Thomas Cable (1993). *A History of the English Language*. (4th ed.) London: Routledge.
- Inuzuka, Hirohiko (1989). The Palatalization of Word-Initial /k/ before /i/ and /e/ from Latin to French: A Generative Phonological Approach. *Sophia Linguistica*, 27, 151-163.
- Elcock, W. D (1960). *The Romance Languages*. London: Faber and Faber.
- Levis, C.T. (1997) *Elementary Latin Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- Orefice, Giuseppe Alberto (1973). *The 5 Language European Dictionary*. London: London Editions.
- Richard E. Prior & Joseph Wohlberg (2008). *501 Latin Verbs*. New York: Barron's.

(岩手大学教育学部英語教育科)